



みんな、
同じ世界に生きてた。

心って、本当にあるんだ・・・って思った。

いつも、なんで不安になるのかとか、悲しいなんて感情もあまり感じなかった。

毎日に押し潰されていて、誰かにはきっと教えてもらえない心の安定感も、あったかなかったか、いつもの日常生活は当たり前のように抑揚のない感情喪失の覚悟を覚えて、泣くこともあまりできなくなっていた。

誰かに言われた言葉や、誰かが誰かを傷つけている場面だとか。

誰かが泣いて、誰かが不信感を抱いて、誰かの悩みも知らないままに、自分だけが置き去りにされた気分を覚えて。

同じことが大好きで、同じことを選んで迷うこともなく、ただ誰かのコピーを意識しながら、毎日は消化の一途を辿ってる。

毎日、同じ人が現れるこの世の中に、いつかうんざりするんじゃないのかと不安感ですら同じ感情で処理されてしまっただけ。

システムは、毎日いろんな人を作ってく。

あたしは、感情に流されることもないまま、ただ生きることに実感を覚えることなく、毎日が消費されていくことを覚えて、だからこそ人と同じことを選んで、同じものを好んで、同じ毎日を感じて、同じだからこそ人を感じることもできたと、認識は誤りを生じ、いつか壊れることに不安もないような、どこか恐怖を抱いていたり、でももしかしたらどこかで壊れることを望んでいたりもしていた。

壊れたら、誰があたしを笑うんだろう。

笑ってる自分。

人を笑う誰か。

誰かが笑って、自分がなくなる瞬間。

誰かは、何になるんだろう。

あたしは、誰かに怯えている。

誰かはきっと、生きていくだろうし。

誰かはきっと何も感じることもないまま、自然を不自然に変えて、無秩序な心の在り処を知らないと豪語して、きっとあたしは蝕まれていることに気付いて、毎日はひび割れたガラス細工が散乱している地上を歩いているかのように、そして人はその上を歩いて行って、あたしはそんな破片に絶望感を敷き詰めて、誰かの一言に怯えて、なぜ人は生きていくのかを考えることもないまま、同じ意思を否定している。

同じ世の中。

同じ人たち。

一握りの、心を潰された人たち。

同じように、笑ってた。

安心なんてないのに、信用なんてないのに。

誰かが、人を笑う時。

誰かが、笑顔を消す時。

いつもの場所から、誰かがいなくなった時。

毎日は、当たり前のように同じ幸せが待ってるだなんて。

毎日は、変わらない幸せがあったって気付いた時。

もう、それはあたしが知らない場所にいたからこそ、誰かが見えなくなっていたんだ。

人は変わったって思った。

人は非情なんだって思った。

生きていきたくなんか、なかった。

怖くて。

本心のない世界。

誰が、それを見ることになる？

・・・あたしは、どこにいる？

朝、クロワッサンを一口食べたら、喉元で押し戻されて、吐いた。

体調が悪いのはわかってたけど、それではないことに、少し苦しんだ。

会社に向かう途中、気分が悪くて、人混みでさえも拒否する感覚が自分を襲うことに、底知れぬ不安を抱いた。

ホームの椅子に座って少し休んでいると、いつもの風景でさえ歪んで見えて、今いる世界を放棄してしまいたくなった。

人間なんて、たった生きるだけ。

いつもは在って、でもそこにいつもの人たちがいて、毎日は過ぎて、そこに自分が在って。

生きてることに、いつもの不安はなかったし、そこにいることで、安心は当たり前だった。

人は、優しかった。

いつも笑顔でいることに、そのすべてがあるかのように。

誰かを想うことだって、当たり前のように。

誰かの言った言葉が、自分を支えていたことに気付く瞬間も、もしかしたらどこかにはあったかもしれない。

気付くことができたなら、自分を想うことだってできたし、自分の生きる意味でさえ理解できたかもしれない。

人を愛することが難しいと感じた時、人を理解できなかった理由をどこかに存在させようとしていた。

時間が止まってしまったかのように、生きることに理由を探していた。

誰かがきっと、いつものようにメールを送ってくれて。

誰かからの着信を、いつものあたしが受けていくことに不自然さを覚える。

毎日の繰り返しを、ただ燃焼させながら生きるだけ。

家に帰ると、すべてが止まっていた。

何か、自分の家じゃないような気がした。

無言は、不思議と怖くないと言ったことがある。

笑顔で、ただまだ人を信じていることができていた頃。

何も、悩む必要はないよと、いつも誰かが言っていた。

無言は、自分を孤独にした。

あたしはきっと、この世のすべてに恐怖を抱くかのように。

毎日は変わらないよと言ってくれた言葉を、ただ信じていたあの頃の気持ちを、まるで幻にしてしまうくらいの恐怖に、あたしの目に映るものには、誰かの見た景色がもうなかった。

希望を、誰かに教えてもらいたくて。

メールは、そんな必要性を覚え。

着信記録は、そんな人たちとの最後のつながりのように感じていた。

心配なんて、ホントはありきたりな言葉の中に存在してる。

一言は、誰かの心の中に残ると決まっっていて、だからこそ、そんな言葉が誰かのために存在している。

言葉で自分がつながっていることに、自分の必要性を探していた。

同じ人は、いっぱいいたし。

そこに、そんなうちのあたしがいたように見えるし。

それだからこそ、人と会話することの意味を考えるたびに。

あたしには、ただ心に何かを想うことが、どんどん自分を孤独にしていたと、きっと誰かに言われていたように感じていた。

メールが来なかった日。

孤独なんて、意識もしてなかった。

笑顔なんて、どこにでも溢れていたし。

だから、人を信じていく心は、いろんな人を想う一瞬だって感じていた。

メールを待った日。

孤独があったなんて、知らないでいた。

心には、誰かを信じていたかったことや、誰かからの言葉を信じてみたかった気持ちを、誰かの存在で、信じることの希望を抱こうとしていた。

メールを必要としなかった時。

人は、言葉で生きていたと知った。

誰かの言葉が、自分を消した。

言葉は、きっと必要だから、どこかでは自分を助けてくれる言葉が存在してる。

苦しみて、何であるんだろう。

誰が、その瞬間、それを思っていたんだろう。

それは、誰かの痛みだったのかな。

あたしの痛みは、誰かのものだったのかな。

それが、あたしだと気付くには、この世にあたしがいることの意味を、誰かは気付かないでいる。

あたしがいること存在を、誰が喜びに変えてくれるだろう。

幸せは、形じゃないから。

そこにあることを信じられず、そんな喜びの中にあたしがいたことを知らずに生きて、自分をなくしていることに、いつかはきっと知ってしまうことになると感じた。

あたしがいる場所は、誰かがいた場所ではなかった。

あたしがいたことを、誰かはきっと知らないでいられた。

幸せは、あたしのいない場所で、自然な形を作りながら、人のためにあった。

あたしは、自分を壊すことで、自分をなくすことで、誰かを知ることもなく、誰かにきっと知ってもらいたくて、幸せはどこかにあったと信じていた頃を思い出して、誰かを想い始める瞬間を、またメールという言葉の並列で確かめようとしていた。

言葉は、時として暗い森を彷徨った。

誰かの言葉は、いつしか暗い森に消えていった。

傍にいた夜。

何もない夜。

誰かはきっと笑ってた。

誰かはきっと幸せだった。

一人では過ごせないと、ドラマでも言わないような言葉を平気で口にしたりした夜。

誰かは笑わないでいてくれた。

あたしは、笑ってたのかな。

泣くなんて、あまりに遠くて。

同じ価値。

同じ時間。

同じ気持ち。

同じ日々。

笑ってたから、幸せだと思ってた。

誰かが、勘違いだよと、言うかもしれない。

笑ってたのは、自分だけだったりとか。

夜は、いつも同じではなく。

泣いたなんて、誰にも言えない。

笑ってたなんて、誰かにはきつとすることができて。

幸せなんだ。

そんな言葉がほしくて。

でも、言葉では幸せを感じることができないと、初めて知った瞬間も。

誰かが傍にいてくれたからって、そこに幸せがあるとは言えなくて。

笑ってた。

人は、何も感じずに笑ってた。

ただ、あたしが傷ついてても、幸せだと訴えてきたから、あたしは傷ついたのかな。

人は勘違いだよと、口にすることが多い。

あたしは、勘違いという言葉に口にすることに恐れを抱いていた。

毎日は、本当に存在していたのか。

時間が止まった夜。

時間が進まないでいた朝。

時間を感じることもなくなった瞬間。

生きるのは、たった今の世界。

本当とは、誰かがきつと教えてくれたんだと。

孤独とは、今の瞬間にも誰かがきつとどこかで訴えてた。

知らない世界。

知らない人たち。

知らない瞬間。

知らない時間。

知らない感情。

知らない毎日。

どこかには、きっと知らないことばかり。

あたしの、たった何十年の毎日。

自分は幸せだと、いつかは言えたんだ。

誰かは、きっと大切な存在。

必然性のもとで、時間は幸せのために在った。

あたしを、どれだけの人が知るんだろう。

たった、あの日のために。

たった、あの瞬間の涙を消して。

ただ、永遠を信じながら、誰かを愛したあの日を、そのすべての永遠として。

笑ってたのは、誰かを知って、幸せだと感じたから。

いつかは、森から出てくるだろう。

自分だけの、感じたそんな夜の出来事も。

大好きだった人から、メールが来なくなった。

1ヶ月、家から出られなくなっていたことを、誰にも知られないまま、毎日がただ夢を見ていたかのような、幸せの一瞬を勘違いして、朝はやってきた。

外の景色を、眺める時間も。

ただ、何も話せなくなった日々の自分に、時間は失われた一瞬を捉えてしまった苦しみと、涙のない毎日と。

3週間ぶりに食べた朝食。

3口で、お腹がいっぱいになって。

ただ、お腹がいっぱいになったと思い込ませて、それを幸せのうちのひとつにしていた。

何が幸せなんだろう。

笑顔なんて、いくらでも作ることができる。

だって、笑顔を押し殺して、また悲しみの中にいる自分を、ただ笑うだけの自分を見て泣いてる自分を感じてるかのよう。

苦しみなんて、いつかはなくなる。

誰が言っても、きっとそれは嘘の言葉だ。

誰が、それを知るんだろう。

誰かは、笑ってる。

あたしは、今を幸せにしたと勘違いにして、それを苦しんでるのを隠してるだけだと、そしてそれを感じる自分に傷をつけたと満足してる。

誰も知らないことが、自分を追い込んで。

でも、誰が自分を知るんだろう。

誰かからメールをもらっても、もうそこには自分がいなくなってることに、気付かれないまま。

意識がなくなった頃、自分がない世界を想った。

笑顔は、いつだって作ることができる。

誰かに知ってもらいたかった頃、自分は幸せだったんだ。

深い眠りの夢を見た頃、幸せは現実の中にはなかった。

体調が少しだけ良くなった日。

窓から、初めて外の景色を眺めた。

太陽が眩しくて、ただ目を細めることにも何かを感じるものもなくて。

病院へ連れていってもらった日に。

外の景色に、色を見つけることもなく。

雨は降っていなかったのに、ただ何かが目の前を塞いでいた。

傷は深くて。

ただ、食べられなくなったことを理由に、主治医の問診を受けていて。

4種類の薬に、命を抱えてもらっていた。

3ヶ月目になる頃、眠れない日々の毎日に、自分の感情は失われた色と重なって、外の景色には自分を映し出すこともないままに過ぎた日々を、時間が自分をなくしてしまったように、自分を想うこともなくなっていた。

誰かから、メールが届いていたことも。

ただ、文字を見つめる今でも。

生きてることに、何を感じることもないと。

涙なんて、何のためにあるのかなんて。

誰が知ってくれるんだろう。

生きてる友達。

生きてる自分。

生きてる人達。

生きてる毎日。

進む時間。

止まった瞬間。

毎日の大切さ。

想うこと。

つながり。

心。

傷。

24歳になった日に。

笑ったこと。

誰かが、大切に想ってくれたこと。

生きてたこと。

誰かと、生きたかったこと。

きっと、どこかで幸せを想った。

そこには、幸せの瞬間があったことに、その瞬間を捉えたことが、現実だと言いたくて。

誰かが想ってくれたし。

誰かと生きていたし。

あたしは。

そこにいただろうし。

毎日は過ぎていた。

毎日は、知らない間に時間を消費していて、知らない間にあたしは生きていた。

薬の効かない夜の間。

薬に命をつないだ毎日。

嘘の笑顔を浮かべて、いつしか割れた地上を歩いていた。

割れた狭間にいた頃。

24年の命を想い描いてた。

自分をなくした自分。

自分がなくした痛み。

自分の大切さを忘れた瞬間。

大切だと履き違えて、幸せな世界を見てみたかった。

24年の間に、何を想ったかなんて。

誰かはきっと幸せだと訴えてる。

誰かはきっと生きてることを感じてる。

あたしは、狭間にいたから。

割れた場所には、誰もいない世界だったから。

誰かはきともう一人の自分だったから。

自分に会いたかった。

そんな最後の、自分への嘘を。

ただ、笑顔になりたかった日を想い描いた頃に重ね合わせて。

誰かがそばにいてくれたことを。

誰かだと想い描きながら。

24年間の、あたしの記録。

ただ、ひとつだけ希望があった。

最後の日。

笑顔を浮かべていたかった。

誰かは、きっと知ってくれたと。

ただ、想いながら。

今日も、外の景色は変わらずにいた。

毎日は、いつも流れてた。

知らないあたしが、そこにはもうどこにも存在しなかった。

24 ~akashi~ / E N D.

END.



24

～akashi～

著者：七瀬佑衣

電子書籍プラットフォーム：ブクログのpapier
運営会社：株式会社ブクログ